

3. 司馬遼太郎『播磨灘物語』と姫路

羽柴秀吉の毛利攻めに際して御着の小寺家の被官・黒田（小寺）官兵衛は姫路の城（姫路城の前身）を秀吉に提供する。主として司馬遼太郎の『播磨灘物語』から触れてみたい。

(1) 主人公

この小説の主人公は、豊臣秀吉の軍師として知られている「黒田如水」黒田官兵衛孝高であるが、彼の祖父の重隆の代から始まる。

『播磨灘物語』の「流離」「播州」「広峰」の章は、「黒田如水」の祖父黒田重隆の流浪の旅が主題であり、「広峰」は広峯神社の神主に目通りを許され、黒田家伝来の目葉を広峯神社がお札につけて売り出し、黒田氏は、たちまちいくつかの蔵に金穀を積みあげるほ



■姫路文学館から「姫路城」遠望。
官兵衛のころは「姫山」と呼んだ。

「夏の雲」の章では、黒田家は家臣団を率いて、御着の大名小寺藤兵衛の被官になっている。そして小寺家の北の脅威であった香山氏を黒田官兵衛の父兵庫助職隆が率いる黒田家だけで滅ぼし、主君小寺藤兵衛を喜ばせ、空き城同然であった「姫路城」に入り、小寺家の西に備えとなった。

(2) 黒田官兵衛孝高

官兵衛の父兵庫助は主君小寺藤兵衛から小寺姓を名乗るようにいわれ一番家老として活躍していた。したがって御着に入ることが多く姫路城にいないことが多かった。官兵衛（幼名：萬吉丸）は城山から毎日、姫路村に当時草庵を構えていた浄土宗の圓満という老僧の元に通っていた。萬吉丸はもともと身体が弱く、亡母を偲ぶ歌を詠むなど学問が好きだっ

た。圓満が話す漢帝国の謀臣の話などに少しだけ興味があった。萬吉丸は14歳で元服し、16歳で小寺藤兵衛の近習となる。戦場でも使番としての確な状況判断を報告し、見かけによらず肝の座った男であった。

(3) 姫路城

黒田氏と姫路城の関係は、『播磨灘物語』の中から引用して説明しよう。

（かれは、姫路とよばれているあたりに住みついていた。／そのころの姫路は、一望、草遠い野面のなかの小さな村にすぎない。／村のなかに、丘がある。土地のひとは、「姫山」とよんでいた。姫路山とよぶ人もある。そこにちよつとした寺院程度の小城が構えられているが、城主は不在である。城主はこの姫路から五キロばかり東の御着という土地にいる小寺氏で、小寺氏にとっては、姫路城は捨て城のようなものだった。城番がいる程度で、御着城の支城といえはいるが、しかし支城というほどの軍事的価値はいまのところない。）

『播磨灘物語』は中巻で織田信長の重臣、荒木村重の謀反の説得に行った官兵衛の伊丹・有岡城人質、秀吉の三木別所氏干殺し、秀吉の大返し、天王山の戦いなどが中心であり、下巻は姫路城を基地とした中国（毛利氏）攻略の遠征が主だ。

(4) メグスリノキ

黒田家を豊かにした秘薬、目葉はなにか？それは「メグスリノキ」から調製したものらしい。メグスリノキはムクロジ科カエデ属 *Acer maximowiczianum*（エイサー・マキシモビクジアナム）でエイサーは、紅葉する。Acer は切り込みの入った、切れ込みがあるとかの意味のラテン語だ。名前は樹皮を煎じて目薬としたことに由来する。かなり効能がある。

(5) 有馬の湯と官兵衛

伊丹・有岡城から脱出した官兵衛は地下牢に閉じ込められ萎えた足腰を有馬温泉で癒やす。『播磨灘物語』から引用する。（このあ



■メグスリノキ（姫路文学館北館出入口付近）
遠く姫路城の櫓が見える。写真は紅葉していた。